

「木は地球を救う」 — 20

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

明治神宮 - 2

前号でご紹介した君が代、教育勅語、五箇条の御誓文の唱和のことですが、筆者は、昭和20年(1945)の無条件降伏の敗戦宣言、「昭和天皇陛下」の「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」の玉音放送を、集団疎開中の新潟のお寺で聞きました。

小学校6年の時で、この時のことはいまだにはっきり覚えている。担任だった小谷幸二先生は涙ぐみ声を震わせながら、「日本は戦争に負けた。しかしいつまでも、負けたままではいけない、日本は必ず強くなる。君たちはこのことを忘れるな」と話された。「アメリカに勝つ」と多分話されたのではないか。

この言葉通り、日本は敗戦後国民が堪え難きを堪え、忍び難きを忍び努力の上に努力を重ね、遂にアメリカに次ぐ経済大国になった。「日本は負けたままではいけない、必ず強くなる」との小谷先生の言う通りになった。

その後、疎開先の新潟の山奥まで、アメリカ兵が占領軍としてジープで乗り込んできた。完全に占領下におかれた。したがって「君が代」はオリンピックの開会式、大相撲の千秋楽、ボクシング国際試合の開会式などではおなじみだが、「教育勅語」と「五箇条の御誓文」は大げさに言えばこの時以来触れる機会はなかった。

明治天皇の御発意で、つくられたとされる素晴らしい国歌「君が代」、教育はかくあるべしとご教示くださった「教育勅語」そして「五箇条の御誓文」の万機公論に決すべしは、正に今日の民主主義の在り方をご教示頂いたものではないか。

前号でうっかり「今まで忘れかけていた」と述べてしまったことはいかにもお恥ずかしい次第。「粗忽者の早とちり」とお許してください。

◇君が代

「君がは世は、千代に八千代に、さざれ石の巖となりて 苔のむすまで」とは、「小石が成長して、大きな岩となり、それに苔の生えるまで」は、限りない悠久の年月をイメージとして表現したものである。

◇五箇条の御誓文

日本民主主義の基本と、普遍的理念を現したものだ。慶応3年(1867)大政奉還、王政復古を経て幕藩体制に代わる新政府が成立した。しかしながら開国間もない当時の世情は依然混沌としており、国際的にも多くの問題を抱えていた。慶応4年(明治元年)(1868)明治天皇は諸侯とともに神前で維新の基本方針をお示しになった。天皇自らが、国難の先頭に立ち伝統ある国を守り、世界各国との親交を深めつつ、国を隆盛に導こうとするにあたり、国民への協力を求める^{しんかん}告諭がご誓文とあわせて布告された。

五箇条の御誓文 以下の・印は解説

一．広く会議を興し、万機公論に決すべし

・広く人材を求めて、会議を開き議論を行い、大切なことは全て公正な意見によって決めましょう。

一．上下心を一にして盛に経綸を行ふべし

・身分の上下を問わず、心を一つにして積極的に国を治め整えましょう

一．官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦^{うま}ざらしめんことを要す

・文官、武官、国民も職責を果たし、達成できるよう人々に希望を失わせないことが肝要

一．旧来の陋^{ろうしゅう}習を破り、天地の公道に基くべし

・悪い習慣をすて、何事も普遍的道理に基づいて行う

一．智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし

・知識を世界に求め、天皇を中心とするうるわしい国柄や伝統を大切に国を発展

我国未曾有の変革を為んとし、朕、躬^{ちん}を以て衆に先じ、天地神明に誓ひ、大いに斯^{この}国是を定め、万民保全の道^たを立んとす。衆亦此旨趣^{しゅうまたこのむね}に基き協心努力^{もとづ きょうしん}せよ

・我が国は未だかつてない大変革を行おうとするに

あたり、私は自ら天地の神々や、祖先に誓い、重大な決意のもとに、国政に関する基本方針を定め、国民の生活を安定させる大道を確立しようとしているところです。皆さんもこの趣旨に基づいて、心を合わせ努力してください。

この五箇条の御誓文は明治維新の指導精神として、近代国家建設の様々な施策に受け継がれました。

◇昭和天皇引用

特に昭和天皇は、敗戦後の昭和21年元日の「新日本建設に関する詔書」において、五箇条の御誓文を引用され「叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス。国民ガ朕ト其ノ心ヲ一ニシテ、自ラ奮ヒ自ラ励マシ、モッテ此ノ大業ヲ成就センコトヲ庶幾フ」と御誓文の精神に立ち返り国づくりに努めることを決意されました。

などなど、日本の針路をお示しになったと解釈しています。近代の日本は、100年足らずの間に明治維新、敗戦という2度にわたる国難を乗り越えてきた。

神を敬い皇室を尊び国民が一体となつてこそ出来たことと確信しています。明治天皇三つの神文？（敢えて神文と表現します）を引き継がれ、敗戦を乗り越えた昭和天皇の偉業を畏敬の念をもってひしひしと感じている次第です。

現在でも十分に通用するもので、読者の皆様方のご参考に供すれば幸いです。

尚、教育勅語は次の機会に譲ります。

◇代々木の地名について



鎌倉の東慶寺のさざれ石・解説 細田安治撮影

戦国時代の書状に、「代々木村」の名がすでにあり、江戸時代には大名・旗本の屋敷地があった。現在の明治神宮御苑の東門近くに、「代々木の大樫」といわれたモミの木があり、その名が由来ともいわれます。

現在は残っていませんが、井伊家の下屋敷があったところの大樫は、当時の記録に残るほど大きなものでした。黒船が江戸湾を測量していたころ、その動静をこの木の上から見張らせ、桜田門外の上屋敷に報告させたそうです。(渋谷区ホームページ参照)

このくだりは頂けない。(黒船の動静を代々木の木の上から、見張っていたとはこれ如何にである。)

◇鳥居

鳥居(とりい)とは、神社などにおいて神域と人間が住む俗界を区画するもの(結界)であり、神域への入口を示すもの。一種の「門」である。

◇明治神宮の鳥居

明治神宮には、大鳥居が2本ある。原宿口から玉砂利参道と会館から本殿に自動車が進む分かれ道にあるのが一の鳥居。本殿の神域内に入るところにある大鳥居が二の鳥居で、この二の鳥居が、檜材日本一の大鳥居、明治神宮のシンボルである。

創建時に、日本国内にはこれだけの大鳥居に間に合う檜の大木はなく当時の台湾総督府ほか、台湾国民の絶大なる協力を得て檜の大木を探し出してくれたものだ。関東大震災、敗戦など数々の苦難により、建て替えねばとの計画が持ち上がったが、日本国中探し回っても適材無し、この時現れたのが、東京で材木商を営む川島康資氏だ。氏は自分が木材業を親の代から続けていられるのは、明治神宮のおかげと、献納を願い出、苦心惨憺台湾から調達した。

詳細は次号に譲る。続く。



明治神宮大鳥居 明治神宮ホームページ参照



明治神宮

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>